
未完男

卯月弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未完男

【Nコード】

N9549D

【作者名】

卯月弥生

【あらすじ】

人に気持ちを伝えるのが不器用な男が器用になろうと不器用に努力する話。果たして彼は完結できるのでしょうか。そして、彼なりの答えは見出せるのでしょうか。

いつも通り（前書き）

注）本作品はフィクションです。実在する人物団体名とは一切関係ありません。

あくまで創作です

いつも通り

「…ごめんなさい」

ああ、またか。僕はそう思った。

「流一のことは友達としか見えない…」

彼女は僕を傷つけまいとフォローを入れてくれているようだったけれど、その言葉はほとんど耳に入らなかった。その代わりにはつきり頭の中に響く音がある。

ああ、またか。僕の心の中ではいつまでもその言葉が繰り返されていた。

僕は長野流一。大学二年生。趣味は音楽鑑賞と読書、それとTVゲーム。TVゲームは飽きっぽい僕には珍しく唯一15年以上続いている趣味だ。男より女友達の方が多いのは、男のテンションについていけないっていうのが大きな理由だと思う。女のドロドロした感じにもついていけないけど。成績はまあ普通。中肉中背で、顔は言うほど悪くないと思う。どちらかといえば男らしい顔立ちをしている、と言われることが多い。中身に関しては分からないけど。好きな食べ物ラーメン。インドアな僕だけど美味しいラーメンを食べるためなら二時間待っても苦にはならない。東京デイズニード？平日の嵐の日だったら面白いかもしれない。お茶とコーヒーだったら間違いなくコーヒーを飲む。ブラックも好きだけど少しだけミルクを入れるとたまらない。苦味と酸味が消えないギリギリのところを見極めるのは難しく、20年間の人生で至高のコーヒーにはまだ一杯しか出会ったことは無い。あそこのおばさんはまだ元気にしてるだろうか？幼い時から人に気持ちを伝えることが苦手だった僕が、たった一人だけ心を開くことが出来たのがおばさんだった。おばさんと言っても家族ではない。埼玉県川越市の駅通りから一本入った道にある小さな喫茶店を営んでいる…本名は知らない。

至高のコーヒーを飲んだのはそのおばさんのお店だった。中学校に入学して、僕が初めて虐められて帰ってきた時のことだった。僕はお店に入るなり臆面も無く泣き出した。おばさんはそんな僕を椅子に座らせると何も言わずにコーヒーを入れてくれた。そして僕が泣き止み、事情を説明するまで黙って頷いてくれた。優しい人だった。

お店にはいつもお客さんはほとんどいなかった。一回お客さんがいなくて大丈夫なのかと聞いたことがあった。子供心に心配になるほどお客さんはいなかった。おばさんは優しい笑みを浮かべていった。大人になったら教えてあげる、って。僕ももう二十歳だ。世間一般では充分“大人”として見られる年になった。久しぶりにおばさんのところへ行ってみようかな。高校入学の頃からなんとなく足が向かなくなり、そのまましばらく行っていない。お店自体は閉まっていけないようなので、今度時間を作って行ってみよう。

僕はこんな風に自分のことを人に伝えるのが大好きだ。でも、こんな風に自分のことを人に伝えるのが苦手だ。それは好きだったり、嫌いだったり、怒ったり笑ったり泣いたり苦しかったりみたいな感情もそうだし、僕自身の経験や能力を伝えるのも苦手だ。

僕は人と触れ合うのが好きだ。でも、僕は人と触れ合うのが怖い。やりたいけどやりたくない。したいけど出来ない。

僕は、矛盾の塊だ。

「：これから友達として仲良くしてね」

どうやら、彼女のフォローが終わったみたいだ。彼女の「ための」フォローなのか、彼女の「優しさからの」フォローなのかは分からないけど。

「じゃあ、行くね」

「分かった」

僕は何を分かったんだろう。彼女の優しさか、彼女の体裁か、『あ、またか』なのか。

去っていく彼女の後姿に僕は何を求めていたんだろう。

三人目だった。

わきあがる疑問―あと友との語らい―

「とりあえず、お疲れさま?」

「…ありがとう」

「それで、とりあえず乾杯?」

「…そうだね」

「はい、じゃあかんぱーい!」

「かんぱーい」

あの後僕はいつもの場所で、いつもの人に、いつものように、いつものことを語っていた。いつもの場所はパリスモールの中の居酒屋。いつもの人は目の前にいる永井桃子。いつものようにとは、喋りたけれど喋りたくないっていう口が重たい感じ。そしていつものこととは、いつものこと。

「最近しょっちゅう会ってる気がするんだけどさあ」

「まあしょっちゅう声かけてるからね」

「あたしもそーとー暇人だよね」

「そのうち半分以上は奢らされてるんだけど」

「ごちそうさまでーす」

「…おそまつさまです」

桃子とは高校生の時に出会った。知り合った縁は同じ部活だったということだけだけど、今でもこうやって話を聞いてくれる僕の数少ない友人だ。童顔なせいかな、いまだに中学生に間違えられるというから驚きだ。一緒に飲みに行くと大抵店員に胡散臭い目で見られるのはどうにかして欲しい。今日入った全国的なチェーン店である「犬民^{わんたみ}」は年齢制限が緩いことで有名だから年齢認証は受けなかったけれど、先ほどから注文を取りに来るたびに半眼で桃子を睨むのは

止めて欲しい。君達もプロなら聞くか無視するかはつきりしなさい。

「でも君も懲りないよね」

「何が？」

「当たって砕ける方式」

「ああ、そのこと……」

桃子が言っている当たって砕ける方式とは、僕の恋愛感についての彼女なりの批評だ。「好き」になるとしてもたってもいられず、「好き」といいたいんだけど、自分の気持ちをやりわり伝えることが出来ないためにすぐ告白してしまう僕の恋愛方法を一言で述べていると思う。相手からすれば何の前触れも無く突然「好き」と言われる事になる。それがいけないのか、他にも理由があるのか知らないけれど、僕は目下のところ三連敗中だ。

「別に俺もやりたくてそうしてるわけじゃないんだけどね」

「やりたくてやってるんだったらすぐに止めなって言えるんだけどね」

「みんながどうやってるのか知りたいよ」

「別に特別なことはしてないんじゃない」

桃子はいつもするように頬杖をつきながら上目がちに言ってくる。ちゃんと話を聞いていないように見えるから止めたほうが良いって言ったにも関わらず、相変わらず続けている。どうやら本人には直す意思が無いようだ。僕はもう慣れたけど、初対面の人は驚くんじやないかな。

桃子の目の前のグラスにはオレンジジュースが空になって、刺さっているストローが露になっている。この子はどこに行ってもまずはオレンジジュースから頼む。飲み屋に行って一番最初にオレンジジュースなんて、それも嬉々として頼むから中学生かと疑われるんだ

よ。

「こうやってご飯食べたり、メールしたり、どっかに出かけたり、学校で話したり。そういうことを積み重ねてお互いに分かり合って行くうちに自然と好きになっていくものじゃない」

「へー…」

それが出来れば苦労はしない。試しに一回見てみればいいんだ。僕が好き な子と話す時にどれだけテンパっているかがすぐ分かる。しかもそれが周囲には分からないって言うのがさらに僕のテンパリ具合に拍車をかける。きつと言われてる当人もなんで僕がテンパっているのか分からないだろう。

「逆に聞きたいんだけど、流一が女の子を好きになる時ってどんなときなの？」

「え？」

「だってそういう過程は全部抜かして好きになるんでしょ？」

言われてみるとそうだ。一目ぼれとは違う。少なくとも顔見知り程度にはならないと好きにはならない。一体どういう過程で僕は人を好きになっているんだろう。

「…でも桃子の言葉を借りるなら俺と桃子はこうやってご飯食べて、メールして、どっか出かけて。そういう過程を経た今、俺たちは付き合ってる？」

「だって流一は私のタイプじゃないから」

「おいおい、それは傷つくわー」

「君だって私に同じ様なこと言ったでしょ」

「まあそうだけど」

その後はいつも通りお互いの大学の話や最近読んだ「ピノの足袋」が面白かった、新しく出た「ペプシコーラ―ソーダ味―」は要するにソーダじゃないか、僕が新しく買った時計がダサいなんて取り留めの無い話をしてその日は解散になった。

ただ僕の心には新たな疑問が投げかけられたままだった。

人を好きになるってどういうことなんだろう。今まで僕は好きにな
っていた「つもり」だったんじゃないか？

その日はこのことばかり考えてしまっとなかなか寝付けなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9549d/>

未完男

2010年10月8日14時14分発行